無佛翁の憶出[[1]](#footnote-1)

李光洙

無佛翁の憶出【１】[[2]](#footnote-2)

＝私が翁を知つた前後のこと＝

　無佛部充家氏は、日併合後初代の京城日報社長であつた[[3]](#footnote-3)。寺内総督が當時の朝鮮内の新聞を止めさせて京城日報、毎日申報だけにし、その經營を徳富蘇峰翁に委ね、蘇峰翁は當時、御自分が社長として經営して居られた國民新聞の副社長で、少年時代よりの友人であり、國民新聞にしろ、民友社にしろ、くも翁の事業ある所には、の形に添ふが如く、所謂緣の下の力持ちの役を務めて來た無佛部充家氏を、京城日報社長、毎日申報社長にゑ、自分は監督と云ふ名義で、時折京城に來られては、義門内の鵲居に居られたのであつた。

　我が初めて無佛翁に御ひしたのは大正五年の初秋であつたと思ふ。當時私は、學校の師を止めて、シベリヤの流浪からも歸り、再び早稲田大學に學籍を置いて居た時で、休を終へて東京へ歸る途中、京城に寄った時のこと、或る日朝早く友燮君にはれて、翁を町の寓居に訪れたのであつた、君は當時、毎日申報での利く記者の一人であり、相氏と共に文名を轟かして居た。君は『阿部と云ふ人は朝鮮人を能く解して居り、朝鮮青年につて語るのをんで居る、君の事は、已に部氏に話して置いた、今日君を連れて行くをした』と云ふのであつた。

翁の寓居はに末なもので、時めく京日社長宅とも思へぬ程であつたが、私には何故か、それが氣に入ったに思へた。何かの縁であつたらうか。時は午前六時。

　しばし洋室風の間でつてゐると、和服姿の翁がにこにこしながら現はれて來た。迚ても肥つてゐて鼻柱の大きい、そして眼尻は下がつてゐるが炯々と光つた眼の人であった。後で知つたことであるが、翁の家は代々道の師範で、翁も其の道にかけては、相當の修を積んで居り、又宗師に就いて、の修業もして居られたさうで、その眼の光や、のわりには、餘いはれがあつたのであった。當時翁は五十の坂を一つ二つ越して居たらうか。

その日は何を話したのか覺えて居ない。汁とと海苔の朝飯の御走になつて甚だ美しくない、げんのしようこのじをまされたことを記して居る。げんのしようこはの薬としては最上のものだ等云はれたことを覺えて居る。

之が縁となつて、私は東京から歸ると、必ず翁を訪ねては、汁や、すきやきの御馳走になつたものだ。翁に逢ふと、私は氣が置けなくて、しかつた。時局の話とか内鮮融和とか、さう云ふ話を翁の口から聞いた覺えはないが、只非常に親しい友人の様に、又は子供の時から、なついて居る、おのをぢさんのに馴々しく懐かしかつた。翁も、私の何處が氣に入られたのか、種々と可愛がつて下さつたのである。

　翁に初めてつた翌年大正六年の休を利用して、始政五年民の朝鮮行脚をして呉れないかと云ふことを、當時毎日申報の監事であった中村太郎氏から、書簡で、東京に居る私に云つて來られた。その時は、毎日申報に連した私の小說『無』を終はり、『開拓者』と云ふ、第二の小說や、東京雜記と云ふ紀行、筆等を連して居た時である。[[4]](#footnote-4)斯くして私は、所謂五道踏破旅行の途に上つたのであるが、朝鮮人記者としては、嚆矢だと云ふので、社や本府からも各地方官憲に通があつたとかで、到る處實に御恥かしい盛んなを受けたのであつた

　私は京城日報編局長の松尾氏から、京城日報の方にも紀行文を寄せて呉れと頼まれたので、全州邊から和文と鮮文と两方で紀行文を書いたのだつたが、松尾氏は、朝鮮人の手で書かれたと云ふらしさの爲であつたらうが、私の候文體の紀行文を初號三段の大きな見出しを付けて、二面の上段頭記事として取つて呉れられ、之が徳富蘇峰先生の御目に止まつたらしかつた[。]

無佛翁の憶出【2】[[5]](#footnote-5)

＝齋藤總督と靈犀相通じた翁＝

　私が、翁の介で先生に初めて御ひしたのも此の旅行の折であった。私が忠南、全南北をつて釜山に着くと、先生が、朝鮮へ來られると云ふので、無佛翁に連れられて、ホテルの上で先生に朝食の御走を受けながら、一時間、御話を承はつたが、翁は先生に、私のことを種々とされ、先生は『木から多島海を經て麗水に到るその文は好かつたよ。木府尹に話した處等旨かつた。國民に來て呉れないか』

等、縮する、お褒頂戴したのであつた。

　この時以來二十數年、先生は變らざる、眷と撻を私にはつて居るが、之も無論翁のに依ること言ふまでもない。

　私の、この旅行後、間もなく無佛翁は京城日報社長を止めて、東京の國民新聞副社長の古巢に[戻]られた。翁が京城を出發する時の南大門頭の見送人は、實に大したもので、朝鮮人間からもど、あらゆるを網羅したと聞いたが當時の況は、私は目撃することは出來なかつた。が多分その次であつたらう。翁が再び京城に來られて、時滞在後京城を出發される時には、その見送人の一人であつたのであるが、その時にも見送人は大したもので、役人、實業の々、新聞人は云ふに及ばず、朝鮮貴、所謂親日の人々や民主義者と呼ばるゝ人々、學生、人、絆纏姿等、實に各各種類の人が見送つて居た。

これは實に、翁の朝鮮に於ける生活をしたものであって、にもひ、とも語り、如何なる人の世話をも辭せぬ生活の反映であつたのである。私は内地人方面のことは知らないが、朝鮮人の中で、何かに付けて翁の世話になつたものは、翁の末年二十餘年間に於いて、數百を算するであらう。或は一千を越えるかも知れない。翁の交はりたるは政治人、新聞人、實業家、學生等、所謂知識の人々で、一度翁につた朝鮮人は、翁を氣の置けない親友と思うになるのであつた。それ等の朝鮮人の中には、翁を利用し翁の力を借りて、或種の利己的望を達することを目的としたものもあつたらう。併しながら、その大多数は、翁を通じて日本民の温にし、兩民は、眞に友人になり、同になり得ることをじてのつきあひであったと思ふ。よしや利用の爲に、翁に近ついたものも貧の塊だけでなく、くも人の受を持つて居る者なら、結局は飾氣のない、一切の差別を超越した友にぜずには居られなかつたと思ふ。

　私の如きも、翁に對して求むるものなく、翁も私に對して求むるものなき、さう云ふ交はりであつたのであるが、阿部さんは本當に私を愛し大事にして下さると、二十年一日の如くしみじみじ通して來たのであつた。

　京城日報を止められてからも、或は年一回、或は一年置き位は朝鮮に來られて居た。藤總督時代には、ずうつとさうして居られたであつた。

藤總督は、翁と知己の間で、少くも一度か二度は、藤總督が翁の來鮮をされたと推測する由がある。翁の朝鮮人知や青年に對する廣き交と豊富なる知とが、らく藤總督の参になつたのであらうが、藤總督が『阿部君は眞面目で、好い人です』と云はれたのから見て、人間的に尊敬されたことが解る、眞面目と云ふ言葉は藤子が最も高く價する時に使はれるのであつたに私は思ふ。藤總督自身も成るべく多くの朝鮮人にひ、朝鮮人の眞心にせんと努められた人であり、又朝鮮人からも親しまれて居た人であるが、此ので無佛翁と靈一相通ずる所かあつた様に思はれる。斯くして此の二人は一人は總督として、一人は一浪人として、その地位や任は同じくないが、新同たる、朝鮮人と、眞心と接觸に於いて、渾然と融合して一國民となる礎石を置く爲に力された、その意に於いては相一致する者と云はねばならぬと思ふ。

無佛翁の憶出【3】[[6]](#footnote-6)

＝眞に朝鮮同胞を愛した二人＝

　私が藤總督に初めて御目に掛つたのは、大正十年頃と思ふがその時は無佛翁の介でゝはなく當時の京道警部長であった白上裕吉氏に伴はれて倭城臺の官に於いてゞあつた。白上氏は私を案内して直ぐ歸り、たつた一人總督と間で對談したのであるが、藤總督は私の如き一書生をば恰かも知でゝもあるかの如く打解けて話して下された、自分が朝鮮に來てからの仕事の最も大なるものは朝鮮の山を青くすることである、と云はれたり、朝鮮人に當局や内地人に對する心の度が、もつと素直で、眞面目であってほしい等云はれたことを、記してゐるが、その時も藤總督は無佛翁から私のことを聞いてゐると云ふことや、『部君は本當に朝鮮人を愛して居る』等云はれたのであつた。

　私は今でも、藤總督と部充家翁とは、地位は異つても朝鮮人に對する心持には、共通な所があつたに思ふ。之は私ばかりではない。外の朝鮮人もさう思つてゐたらしく、私は『[若し]藤さんや、部さんのな人が十人も居たら朝鮮の民心は餘變るであらう』と、云ふのを二三度聞いたことがある。今日では事が變つてゐるが、例の大正八年直後の朝鮮人の心にはに險しいものがあつたし官吏と否とは問はず、内地人に對しては猜疑と怖とがく根を張つてゐたので、朝鮮人の鬱な僻み勝な心が、此の二人の赤々な眞心にしては喜びにびざるを得ないのであつたのだ。『日本人があの二人のであつたならば』と思つた朝鮮人は、数知れずあつたことゝ思ふ。併し不幸にして、此の二人にして融けた暖かい心は、多くの場合、再び氷結して了ふのであつた。

それは昭和四年頃ではなかつたらうか。やつぱり藤總督として再び朝鮮に來られた時、冬だつたと思ふが、無佛翁がもう一度朝鮮に來られた。その時も齋藤總督から『來ないか』位の招請があつたに思ふ。當時の朝鮮の思は赤化思や何やらで、だ不であつたし、例の學生事件の起こる少し前であつたと思ふが、藤總督から見れば、第二の大正八年の前と思はれたかもしれない、それで、朝鮮インテリの打旁々翁の來鮮を見たのではなかつたかと思ふ、當時私は病氣で引込んで居た時であるが、翁の寓居が東小門の例の無佛で、市内への往には、私の家の前を通る、路順の関係もあつたらう、翁は時々不意に私の病床を訪れては、朝鮮インテリの甲斐なさ、當局の短見等かれるのであつた、その時は翁も七十を越えた時ではあり、リウマチスや高で、起居も多少不自由で、病人の私が見ても々しい憔悴して居られた。何だか、もう長くあるまいと云ふがするのであつた。

或日のこと、の十一時頃、翁は外套を二枚も重ね着をして、目出帽を冠つて、何だか、シベリヤのロシア人のな装をして、ひよつこり私の所へ來られて、無言に、どつかと私の前に坐られたが大顔色が惡く、眼の光さへも鈍つて居られただつたので、何うしたのかと聽いたら、

『おれは明日は歸る。もう朝鮮には來られまい』

と吐き出すに云つたが、餘して居られるらしく聲さへへて居た。

『小め、おれを運と履き違へてゐあがる』

その小がであるかは、私には想像が出來たし、の由と云ふのも、私には直ぐ合が行つた、當時總督府内には、翁が、當局から不逞の輩と睨まれて居る朝鮮人達とも交遊して、總督に何かと進言する所があると思はれて居るのを、苦々しく思って居た某高官があつたと聞いて居るから、らくその邊との衝突であらうとされた

無佛翁の憶出【4】[[7]](#footnote-7)

＝物欲に括淡な趣味の運動屋＝

翁はに運であつたらう。併し己の爲には毫も求むる所なき運であつた。翁は貴の爲、商人の爲、罪囚の爲、苦學生の爲、寡の爲、絶えず運をして居たのであるが『ありがたう』一言の報をさへ望んで居るのではなかつた。況して財物に於いてをやである。是は私も目睹したことであるが、或る便所長をしてゐる内地人が『何うぞ旅費の一端にも』と云ひながら金一封を翁の前に置いた。

『何か？』

『二千圓』

『おう君も金持ちになつたな。併しおれは旅費持つて居るぞ、銀からつて、有餘るわい』

と云つて、その金を即座に返へして了つた。その男は、數年前翁の世話によつて、今日の生活の基を築いた人ださうで、々辛苦に貯めた金をば、御禮にと差出したのだ。その男は澁々その金の這入つた封筒を、取り上げはしたが、納めようともせず、如何にも當して居る子を見て、翁ははたと思ひ付いたに

『おい、君その金で一つ、困つて居る人を一人助けて呉れないか』

『折角ですから、先生、何卒之を御取りになつて頂けませんでせうか』

『いや、おれは入らないがね。本を押へられて困つとる仁があるんだ。朝鮮の學者だがね。本を押へた奴は朝鮮切つての金持の奴だ。解らぬ奴だ。丁度借金が二千圓あるさうだ。君一つ此の學者を助けて呉れないか？』

『宜しう御座います。』

『それは有難う。あの○の金持めに好い面當になる。だ。君一つその金持の奴に直渡して呉れないか。ふつふふつふ』

と翁はに笑はれた。

翁は報の爲に運する運ではなかつた。又頼まれた爲に運する運でもなかつた。氣が向いたら骨身しまず世話をするのであつたが、を見ても氣が向くであつた。

翁が識的に、朝鮮人と眞心を以て交はることに依つて、内鮮和の助にならうとしたのか何うかは知らないが、らくは、或人がしたに趣的に、只やり度くてやつたのかも知らないが、その結果に於いて、多くの朝鮮人の心の氷結を融かしてそのに日本及び日本人愛を植ゑ付けた事は爭ふべくもない。此の一に於いては、らく如何なる人も翁の右に出づる者がないのではなからうか。

再び朝鮮には來ないと云ひすてて東京へ歸つた翁は、三四年振りに『金剛山を見に來たよ』と云ひながら、もう一度飄然と朝鮮にやつて來られた。熊本の宿で中した後ださうで歩行も困難なであつたが、『何、平氣さ』といつて本當に金山見物にまで出掛けられたのである。金山では長安寺の長慶庵に一月餘も滞在して、餘も快復した『本當に朝鮮は好いね、朝鮮で死んで朝鮮の土になりたい』等とんで居られたのであるが、又もや坂道で轉んでをして了つた。今度こそは朝鮮の見納だよ、と苦笑しつゝ朝鮮を去つたのであるが、私も所用あつて、東京まで御供することが出來た。西原借款で有名な西原氏も偶然下關まで一緒であつた。私は友人の妹を一人預かつて居たので一行三人、京都見物もした。京都では數十年來、翁や先生の定宿である三條大橋の油と云ふ小ぢんまりした宿に泊つたがその主人と云ふのが筒、前掛の番頭の人であるにも拘はらず、大學の連でさへ舌を卷いてゐるの京都學者ださうで私はすつかり恐れ入つて了つた。それに翁の友人である京都蓄銀行の谷村氏が是亦大した學者で、古代の日本と朝鮮との交通史上に掛けては相當の大家ださうで、種々と朝鮮の地や風を聽かれたには、又復恐縮して了つた。

『日本と朝鮮とは、昔から一つになるべきであつた。一つになつた方が御互に都合が好いやないか』等と事もなげに云つて居られた。

『それには日本人がなまいきなへを棄てにやらぬ。個人々々其心を以つて結ばれて始めて一つになるのだ役人が張つてはいかん』

 翁は此んなことを云つて、朝鮮からの持越のを字に現はした。

無佛翁の憶出【５】[[8]](#footnote-8)

＝その生涯を物語る葬祭場＝

『今、日本人の中で最小一千八百萬人は高勾麗人や百濟人や新羅人の子だからな』

『京都の町も昔の新羅の都も、建物から風まで似たものであつたよ』

『今でも京都に朝鮮式寺院建物が残つとる』

『平野神社は桓武天皇の御母が御生國である百濟から持つて來られた三柱の神をお祭り申して居るのだよ』

『奈良時代には尚更兩國の關係はであつて、兄弟同士では民的對立と云ふなはなかつたからな』

『うむ、聖徳太子の法華経の御師が高勾麗の様ぢやないか』

『うむ、慧慈と云ふ人だ。百濟の慈聰と云ふ様もね』

 此の二人の如何にも塵世離れした老人は瓢亭で酒を汲み交はしつつ、しとしとと雨の降る中を古寺院や、昔その儘の風致區をめつつ日本と朝鮮とは已に昔から一つであるな氣持で語られて居た。私もその氣分の中に溶け込むことが出來たし、お互にかうしたの中に居たら、如何に兩民は幸福であらう等と思つたのであつた

私が、もう足掛五年前の昭和十年の冬、東京へ往つた時には、無佛翁はど人事不省で臥床して居られた。麻布三[屋町]の、彼の實に、末な家の南向きの八畳に、木綿の布團にくるまつて素入でやつと、呼吸を續けて居られる翁の側に、私は端坐して、氷の下から見える青白いその額を、して居るより外、何うすることも出來なかつた。傍に居られた夫人は、

『もう口が利きませぬ。併し時々眼は開きます』

と云はれて、

『あなた、様が見えましたよ、朝鮮から様が』

と翁の耳の所に口を宛てゝ呼んだけれども通じないらしかつたが、しばらく經つて、翁はぱつちり眼を明けて、私の顔を見て、微笑しつゝ、頷づいて見せた。が直ぐ又眼をぢて了つた。是が私の、翁との最後の別であつたのだ。

元旦であつたか二日であつたか私が二度目に行つた時には、翁はもう遺となつて居られて、その傍には、夫人がたつた一人で居られるのであつた。製の朝鮮の佛が前に端座して居た。

『お正月なもんですから、に御知らせするのも何うかと思つて今日御知らせする積りでしたの』

と夫人は云はれた。

私は己に茶に付せられて一掬のとなつて居られる翁の靈前に合掌した。何んだか呆氣なく淋しく思はれたが、それが翁に取つては本意であつたかも知れぬ。爲すことを爲し終つてかに逝く。それで好いのであらう。

の日に御宅へ往つたら、靈前には、先生夫妻の贈られた生花と、私のそれと、花の種類まで同じな、二籠の生花だけが、左右に供へられてあつたのも奇緣と云へよう。何んと素な、何んと淋しい光景であらう。併しそれで好いのであらう。

併し芝公園増上寺の場には流石にお々の顔も見え、東京や京城の高官や名士等の花環も數十臺あつて、緣の下で一生を送られた翁に對する社會の認のも窺はれたし、翁の事が天聽にまで達して、の御があらせられたと承はつたのは式の時であつた。式場にまつた客は百四五十人あつたが、當日、徳富蘇峰翁は、熱をこめた長い辞をべられて、その中の一節は東京日日に『部無佛翁』と云ふ見出でされて、翁のそれこそ滅私奉公の一生に手向ける、香奠とはなつたものである。なくして誠ある人間部充家翁は斯くして、一生を終へたのである。翁の蔵書や、主に佛からなる品等は、翁の生前、已に賣られて、その代金で終までの生活費に當てたさうであるが、重病中にも手に金さへあれば、苦學生や、困つた人（大朝鮮人）に渡して了ふので、中朝鮮會の中島司が、その金を預かつて置いて、月々要るだけの額を、翁の手にでなく、夫人に手渡したさうである。その金をさへ夫人にねだつては、苦學生等に渡して了ふので、月末の支拂に困ることが往々あつたとのことだ。

無佛翁の憶出【６】[[9]](#footnote-9)

＝その後の蘇峰翁をめぐる感懷＝

翁の去後、私は先生を訪ねた。無佛翁は生前、私が東京へ往くと、『先生につたか』と聽かれては、『是非先生につて往け』と勸められるのであつた。私は先生をお訪ねすることを、遠し勝ちであつた爲である

東京日日の社賓室で、先生に御逢ひしたが、

『部さんも死んだ。しいことをしたが、立派な人だつた』

と云はれて憮然とされた。翁は無佛翁より一つ下だと聞いて居るが、髪は眞白で元氣の様ではあつても矢張、老衰して居られる[。]唯聲と氣が若い。

その日先生の自車に一緒に乗せて頂いて、民友社まで往つたのであるが、先生は途中突然、窓外を指して、

『あれが國民新聞ぢやよ。國民新聞を手す時には泣いたよ。海軍中佐であつた子供をなくした時と同じで悲しかつた。國民新聞までも死んで、俺にはもう子供がないのぢやよ』

とはつはと聲を立てて笑はれたが悲愴なものがあつた。私は突嗟の場合めの言葉にして

『日本中の靑年が、先生の子供ぢやありませぬか』

と云つたら、先生は、私の肩を抱きしめて

『あんたも俺の子供になつて呉れよ。朝鮮に於いて俺の子供になつて呉れよ。日本と朝鮮とは一つにならねばならぬのぢや、大いに、やつて呉れよ』

と『よ』をつも使つて、實に切切と云はれるのであつた。

 民友社の先生の書で、無佛翁の朝鮮に於けるき、朝鮮人士の無佛翁に對する感謝の等話したら、先生は何度も何度も頷いて聽いて居られた。

私が辭して歸らうとすると、先生はやをら子から立ち上つて私の手を握り

『しつかりして呉れよ。牢に這入る様な事をして呉れるなよ。政治は一時ぢや、精神は萬代ぢや。精神をふるのが文章ぢや。あんたは一生を文章で往きなさい。文章報國ぢや。を書きなさい。朝鮮の立場から見た東洋を書きなさい。俺にはもう餘年がないのぢやよ。此の國民を書上げぬ中に、死が來らんとをるゝよ。にぶち込まるゝ様な事をなさらぬが好いですぞ。俺も政治に走れば大臣になれたかも知れぬ。併し俺は文章報國の願を發して、一生を通じて來たのぢやよ』

と云ひ云ひ私の手をりしめては振られた。兩方の顳顬[[10]](#footnote-10)まで下がつて居る純白の髪の房が、リズムを作つて揺ぐまで手を振られた。私は瞼が熱くなるのを感じつゝ民友社を出たのであつた。

これはそれよりの前のことであるが私が新聞社の用で私の社の部と東京會舘で、在京の名士方を招請して一夕のを張つた時、先生は偶々旅行に往かれることになつて出席が出來ぬのが遺だと云ふので、長文の書翰を認められて、電報通信の光永社長をして代讀させられたことがあるが、その手は全文私をされた言辞で私が先生と蘆花先生と兄弟の仕事を一人でやつて居るとか、先生には支に梁啓超あり、朝鮮に某ありて共に東洋の爲にとか、固より私如き者には當らぬ美の言ではあるが、その厚き眷の誼には泣かざるを得ない。

その後、私は新聞から身を引いて、北漢に屛居して居る時、先生は懇切なる問の書と『天生我才必有用』の額を贈られて、私を勵まされた。是などは、直無佛翁に關したことではないが、私の心には無佛と蘇峰とは、何時も一緒に浮んで來るので、つひが此處まで滑つて了つた。

無佛翁逝いて已に四周年、私の生れられぬ先輩の一人、故部無佛居士の思出を、取り止めもなく書き綴る。（完）

1. 1939年3月11日から17日まで『京城日報』夕刊4面に連載 [↑](#footnote-ref-1)
2. 1939年3月11日『京城日報』 [↑](#footnote-ref-2)
3. 実際には阿部は初代ではなく二代目の社長である。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 記憶の混亂がみられる。「東京雜記」は、大正5（1916）年9月から11月に連載された「東京雜信」のこと。翌1917年1月1日から『無情』の連載が始まり、6月14日に終わると、同月29日から9月12日まで『五道踏破旅行記』が連載され、同年1917年11月10日から『開拓者』の連載が始まった。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 1939年3月12日『京城日報』 [↑](#footnote-ref-5)
6. 1939年3月14日『京城日報』 [↑](#footnote-ref-6)
7. 1939年3月15日『京城日報』 [↑](#footnote-ref-7)
8. 1939年3月16日『京城日報』 [↑](#footnote-ref-8)
9. 1939年3月17日『京城日報』 [↑](#footnote-ref-9)
10. こめかみ [↑](#footnote-ref-10)